

Title	シペングレル『泰西の結末』を読む
Sub Title	
Author	飯田, 忠純(lida, Tadazumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.3 (1922. 5) ,p.107(457)- 118(468)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220500-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シペンゲレル『泰西の結末』を讀む

Wenn im Unendlichen dasselbe

Sich wiederholend ewig fliesset,

Das tausendfältige Gewölbe

Sich kräftig in einander schliesst;

Strömt Lebens Lust aus allen Dingen,

Dem kleinsten wie dem grössten Stern,

Und alles Drängen, alles Ringen

Ist ewige Ruh in Gott dem Herrn.

今こゝに紹介しようとする書物は此のゲーテの詩句を題簽にした奇妙なる一つの蠱惑の書である。文を行うにうるはしく、論理のまにまに心に動悸を起させるばかりなロマンチズムの匂ひに充ちた豫言者の書である。此れを讀めば、いろいろの Frage や Problem が湧き出てくる。哲學者の眸には奇しき夢幻の如く、歴史家の心臓には痲痺の發作これ避けがたい。とまれ「考へる」書物であると共に享樂の欲情をそゝる「阿片たき込み」の書

シペンゲレル『泰西の結末』を讀む (飯田)

物である。著者オスワルト・シペンゲレル (Oswald Spengler) は一九一九年ミュンヘン初版の此の書を『泰西の結末』(Der Untergang des Abendlandes) と名付けた。私が手にする事の出來た第一巻を「形態と實相」(Gestalt und Wirklichkeit) と小銘をうつてゐる。緒論の外に本論を次の六章に分つ。

第一章 數の意義

第二章 世界史の問題

(一) 觀相論と系統論と

(二) 運命の觀念と因果原理と

第三章 大宇宙

(一) 世界形象の象徴論と空間問題と

(二) アポロ的、ファウスト的、魔術的靈魂

第四章 音樂及び彫塑

(一) 成形藝術

(二) 動作と肖像と

第五章　精神形象と人生感情と

(一)　精神の形式

(二)　佛教、ストア哲學、社會主義

第六章　フアウスト的並にアポロ的自然認識

第一章に於ては數の論理學、第二章に於ては歴史論理學、第六章に於ては自然認識の論理を展開する。第三章は第四章に於て個別的藝術を云爲する準備として文化所産一般を考覈する。論理の世界藝術の世界に遊ぶ傍らに、著者は第五章に於ては心理的問題、社會的問題並に倫理的問題に論點を進めてゐる。今ま此の書が提出する疑問を要約すると、Irrationalismusの問題や歴史因果律の問題や相對論の問題がその主なる者として浮んで來る。

從來の組織的哲學並に倫理的哲學が滅びて尙ほ殘る西歐の唯一の精神可能性は、希臘的懷疑思想と相呼應すべき比較歴史形態を先人未發の方法で究める事であると考へた著者は此書を世界史形態學概論 (Umriss einer Morphologie der Weltgeschichte) たらしめようとした。即ち『比較對照は、それが事件の有機的構造を赤裸々にする限りに於て

歴史的思惟の幸福である』(S. 6)と考へた結果生れたものが此の書である。『抑々世界史とは何ぞや。それは、一個の精神的可能性、一個の内的要請、形相感の表現である』併し此の「世界史」なるものは吾等に映じた世界の姿である、人類世界の形象ではない、『實際、世界史の形態といふ事も吟味を経ざる精神所産である。』(S. 20)『歴史としての世界は、之と相對する自然としての世界より把握し觀照し形成すれば——現實の新なる部面 (ein neuer Aspekt des Daseins) であつて』(S. 7) 個の事象の偶然と不確實との彼岸に歴史的人類の言はゞ形而上學的組織を任務とする「歴史の論理學」をシペンゲルは企てたのである。けれども此の結果は Individuelle Kausalität を論ずるにあらずむしろ Typische Gesetzmässigkeit の轉移を唱へる事となる。一切存在の主要題目を釋明して未來を豫測するといふ限りに於て最早歴史哲學たるよりはむしろ社會學たるべきものである事は方法論的意味から考へて明白である。けれどもシペンゲルが此書在つて初めて歴史豫測の實驗が企てられ

るのであらうといふ宣言を爲してゐる限り、シペ
ングレルの識闚に、普遍妥當の因果律を探究する
といふ事は別に問題となつてゐないで彼は歴史考
察法を「藝術的」と取扱つてゐるのである。然ら
ばシペングレルに於て自然と歴史とは如何なる差
異對立を顯現するのであらうか。彼に従へば「自然
とは、その下に於て高き文化の人類が其の五官に
依て直接受けた印象に統一と意味とを與へる形態
である。歴史とは、それよりして人類が想像力によ
り世界の活ける現實を其の特有の生活に相應じて
把握し以て之に深甚の實相を賦與するところの形
態である。」(S. 10)「然るに生命なき形相を把握す
る手段は類推法である故、此處に自ら世界の兩極
性 (Polarität) と週期性 (Periodizität) とが辨別せ
られる。歴史的現象形式の數は限られてゐるとい
ふ意識、時代、時期、情勢、人物みな或る典型を繰
返すものであるといふ意識は常に存在するのであ
る。」(S. 4) 此處には自ら歴史的因果律、個別的因
果律の論理が問題とならなくてはならぬ。史實の
因果關係を個別的のものとして構成する場合に

シペングレル『泰西の結末』を讀む (飯田)

は、同義支持者の時間的差異相に關するものとし
ての代りに精神的統態ガイストリッペンタリテに關するものとして考へ
られ得るものである。シペングレルは、無機物、
延長、既成態、自然律乃至因果關係の形態學を説
く代りに、轉成や有機物や生命自體に方向並に運
命を差し向けるものの形態學を闡明しようとし
た。即ち彼は其實體に依らず形式に基いて極めて
鋭く、有機的世界像を機械的世界像から區別し、
形態の實質を法則の實質から區別し形象及象徴を
様式及組織から區別し、*das Einmalig Wirkliche* を
das Beständig-Mögliche から區別する。また計畫的
に働く稠密な想像力を、合目的に還元する體験
から區別し、年代的數を數學的數から區別する。
彼が此書に於て取扱つた歐羅巴の結末とは要する
に時間的にも空間的にも局限された現象であるが
何人も見る如く『一個哲學的題目』である (S. 4)。
此處に彼が考察を施した歐羅巴の結末とは終に
文明の問題に外ならぬ。凡百の歴史的根柢疑問が
此處に提供されるのである。文化の論理的成果た
るを文明といひ文化の完成と結末とを文明とい

(四九)

一〇九

ふ。文明 (Zivilization) は一文化 (Kultur) の避け難き運命である、文化が頂點に達した時をいふのであつて、歴史形態學の至難なる疑問は此から解決されるのである。素より文明の状態は開化の程度高き人間にして初めて可能なる極端の状態であり最も技巧を凝らした状態である。文明は終結である、轉成の結果として生起となり、生命の結果として死となり、發達の結果として靜止となりゆいた状態である。文明は抗らひ難き最後であるが、最も内面的な必然性を以て繰返しまだ到達する状態である。かくして羅馬人は希臘人の後繼者たる事が分る。歴史的過程としての純粹文明は非有機的になり消滅し行く形式の漸次的荒廢である。文化状態から文明状態への過渡推移は、第四世紀に於て古代世界之を行ひ、第十九世紀に於て歐羅巴諸國之を行つた。ルッソー以來、佛蘭西革命以來我々も亦、文明の階段に入つた。我々は其以來結末の運命を荷つたのである。洵に羅馬風は西歐羅巴の未來を洞察する鍵鑰なのである (S. 43 ff.)。

西歐人が日常用ひ慣れたる「古代、中世、近世」の

圖式は、西歐人の地歩を中軸として描ける高い文化の軌道であつて、之をシペンゲレルは「歴史のトレミー流體系」(das ptolemäische System der Geschichte) と名付け、彼自身の提出する見方をば「史學の領域に於けるコペルニクスの發見」(die kopernikanische Entdeckung im Bereich der Historie) であると考へた (S. 24)。彼は、カントの故智に倣つて己れの勞作をコペルニカスの轉換に結びつけようとしたのであらう。抑もシペンゲレルの言ふ世界史とは何であるか。第二章「世界史の問題」の論述は之に答へる爲に設けられたのである。

シペンゲレルに従へば、「古代Ⅱ中世Ⅱ近世なる圖式は信するに足らざる無意味の圖式である」(S. 28)「教會を通じて創られたグノシス派の考へ方である、かくてまた羅馬皇帝全盛時代の教父的世界感である、極めて局限された範圍内に於ては確に肯綮に中つてゐたものである、しかし此れには印度の歴史も埃及の歴史も含められる事はない、當時世界史なる用語は専らヘラスとペルシアとの中間を舞臺とするドラマの一齣を示指したのであ

る、而して近世なる概念は西歐に於て附加する事となつたのである (S. 24-25)。されば世界史の中に永遠の形態と再造との像を見、有機的形相の驚くべき轉成と経過とを眺めたるシペンゲレルは、今日に於て最早中世の語は無形式である、此の不確實な取扱方を踏襲するものは新波斯の歴史アラビアの歴史及び露西亞の歴史を判定する事に用意がないからであると論じてゐる (S. 29-30)。此點大に我意を得たものである。イラン文化、イスラム文化並にスラヴ文化を度外視して世界史を談ずるが如きは到底許されない。『プラトンが人性に就て論ずる時、彼は外蠻に對して希臘人^{ヘレネン}を考へてゐる、古代生活並に思惟の非歴史的様式を反映してゐるのである。然るにカントが例へば倫理的理想に就て哲學するとき彼は自分の命題があらゆる種類の人間あらゆる時代の人間にも妥當する事を主張する。美學に於て彼は單にフキヂアスの藝術やレムブランドの藝術のみの原理を公式化しはしない、同時に藝術一般の原理を立てるのである。けれども彼が以て思惟の必然形式を固めるときそ

れは尙ほ唯だ西歐羅巴的思惟の必然形式たるに止まる。一度アリストテレスに眸を轉すれば本然に別途の趣を示して、此處には不明確ならぬ他の重大な精神のそのうちに反映してゐる事を教へるのである。カントの理性批判の基礎を爲し西歐人にどつて慥に一切體系の本源となれる世界的唯我主義は既にユルフラム・フォン・エツシエンバッハのバルツェグルやダンテの神曲などにも存してゐるのであるが、それがソロギエフの如きロシアの哲人には理會されないものであり、全く理智の質を異にする現代支那人やアラビア人にとつてカントの言説は明かに驚異に價するのである。之に依て之を觀るに、西歐の思想家が其の結論に存する歴史の相對的特質を洞察しないといふ一事は良に缺點である (S. 31)と考へて來たシペンゲレルは既にして、"Untergang" といふ概念を絶對的相對主義の意味に解する。彼は文化人類の一切の努力が且つ浮び且つ沈む事であり海の波紋の如きもの、實に一切萬有は相對的價值あるに過ぎずと見た。けれども吾人を以てすれば文化價值と生命價值との

爲めに努力するのは徒勞ではない。又たシペンゲルは反覆するものの中に永久的價值が微睡し潜在するものと解した。

彼は歴史の歸趨を豫定しようとして試み表面の結末が普遍妥當の眞理であることを確立しようとした。そして「形相の認識」若しくは「形態學的知識」なるものを主張して論理的難關を救はうとした。けれども論理的には普遍妥當の思惟の根本命題を豫想しない限り、彼の發見が一切の文化に妥當する事は不可能である。また形態學の概念を通じて形式と内容との限界を洞察する事が出来ない。それにも拘らず彼の眼前には不滅なるものも絶對なるものも存在しない、一切は時間的文化和相關聯する(S. 238 ff.)即ちシペンゲルに於て普遍的恒久的眞理を探索するといふが如き卓越せる思惟の要求は消えて、諸々の眞理は特殊の人間に依屬してのみ存する事となつて來たのである。かくして彼は Kulturseele なる概念を構成し之によつて文化の典型スタイルを説いた。

然らば則ち彼が文化の典型を如何に描いてゐる

かをあわただしい乍らも見てゆかなくてはならぬ(S. 254-284)。

抑々古代文化はアポロ的文化で現實陶醉の刹那生活を讚美したものである。古代的精神はエーケリド的である。事物と事物との間の距離は非有(Nothing)である。また「心配」(Sorge)の根本感情を知らぬ。古代の繪畫は黄赤黒及白を以て彩り、戀愛詩の中では徹底的に刹那に歸依し又た刹那に於て過去未來を忘れる性慾の徵表たる生殖器崇拜が支配する。アポロ的文化に對して起つたものは西歐の憂鬱な文化であつて此れは謂はゞファウスト的欲求が充足されずに無限に募つたものであつた。西歐が極端に歴史意識をもつた時、之と相對して印度では歴史を夢幻の裡に認めてゐた。まことに印度の文化はフアンタチアの生活に顯はれた。然るに轉じてアラビア文化に想到すれば其處に吾人は魔法的精神を見なくてはならぬ。アラビヤ文化はエウフラテス河畔並にニイルの岸に育まれその顯現するところ終に、代數學、煉金、象眼、唐草模様、カリフ、モスク、難行苦行と「キズメット」

といった様な象徴となつて生れた。アラビア文化の範域内に於ては一切の事象は形體界の法則を支配すると共に實現するところの神秘力の具現であつた。アラビヤの魔術的象徴は又た凡百の神秘や盜賊の神出鬼没や灼熱にもえた沙漠などによつても理會する事が出来る。ところが埃及的精神に至つては勇敢である。あえぎもなくなげきもなく、こちがほなる涙もなしに、大膽に巨大な象徴をばニイルの岸邊にやつてのけた。狹隘難澁な運命に抗して無限に苦闘を續けつつ而も過去と未來とへ思ひを走せて埃及精神の象徴をピラミイドの姿に於て構成した。南の國の晴朗な蒼穹の下、日輪がいやき映ゆる地中海、希臘や羅馬のもえるが如き色彩の流れるところ、其處に官能生活と現實陶酔との人間が生れるが、一たびアルプスを越えれば自ら南北の差別相は眼前に展開する。北方の邦では灰色の霧は深く、山の背は黝み、例へばゴチク寺院が蒼空の高きを求めて屋根鋭く、無限の空間をあえぎ求めて此の世界を離れ嚴肅な至上命令のゾルレンと變じ、ルーテルが生れる。いはゞ緊張

シムンゲレル「泰西の結末」を讀む (飯田)

した北方の力がやがては南方の明晰、素朴を克服する事となつた。近代的西歐の精神は併し總てファウスト的欲求を以て象徴する事が出来る。此れは古代精神の盲目的運命の世界へ投げられたのは全く趣が異なる。オリュムプは現實的希臘の地上に立つてゐる、教父の説いた樂園も摩訶不可思議力の漲る魔の國であるのはコーランに見えるところと變らない。然るにニールンゲン物語のジューダフリドを見よ、バルツェブルを見よ、トリスタンを見よ、ハムレットを見よ、ファウストを見よ、都て是れ西歐的精神に屬する。何人もラルフラムの書いたバルツェブルに於て内的生命のめざめの奇しき物語を讀むであらう。森林に對するあこがれといひ、謎の如き同情といひ、名狀し難い頼なさといひみなファウストの心である (s.257)。ゲートのファウストに於ていつでも動因となつてゐるものは次の句に表はれてゐる (s.258) 曰く、

Ein unbegreiflich holdes Sehnen

Trieb mich durch Wald und Wiesen hinzugehn,

Und unter tausend heißen Tränen

Führt ich mir eine Welt stehn.

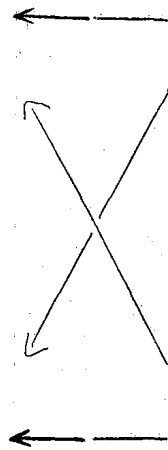
尙ほ此の外にシペンゲレルは成形藝術及び音樂藝術について詳細に述べてゐるが文化の典型が歴史的に如何に繼起するかは以上によつて理會されるであらう。此の典型はゲーテのいふ „Urphänomenon” である。而して此等の「大なる典型に就て古往今來を描き以て比較する事が文化史の任務となつて現はれる」 „Der Kulturgeschichte steht die Aufgabe bevor, die vergleichenden Biographen der grossen Stile zu schreiben.” (S. 285)。併し此處に注意しなくてはならぬ事は、歴史探求の結果生ずる外見上のパラドクソンである。シペンゲレルはいふ、科學といへば常に自然科學である、知識といひ經驗といふものはたゞ「既に生起したものの」「擴張されたもの」「認識せられたもの」についてのみ存する、生命が歴史に屬すると同じく知識は自然に屬する、而して此れはエレメントとして把握され空間の中に考案され原因結果の法則に依て形成されたる感覺的知覺シンリヒカイトである、果して此の如きが科學であるとすれば一般に歴史の

科學なるものは存するであらうか、歴史の姿に於て事實「無機的なるもの」「方向なきもの」は疎遠である、何人も歴史を體驗する事深ければ深い程益々因果的印象は希となりゆく、ゲーテの自然科學的著作を見よ、何人も生きたる自然を描いて其處に法則を見出さぬのに驚くであらう、ゲーテにとつて時間は距離でなく感情である、單に分析を事とするのみで事物を感じようとしなない學者であるならば此場合 das Letzte & das Tiefste を體驗しようとはしないが歴史は此の二つのものを要求する、されば歴史を研究するものが意味深からんとすればする程本來の科學なるものから離れるといふパラドクソンが正しい事となる (S. 210-211) と。而して此間の事情を明にする爲めに、シペンゲレルは次の如き圖式を描いた。(S. 211)

Seele ————— ↓ Welt

Leben
Wirken
Richtung
Schicksal
(Form des Erlebens)

↓ Wirklichkeit
Ausdehnung
Kausalität
(Form des Erkannens)



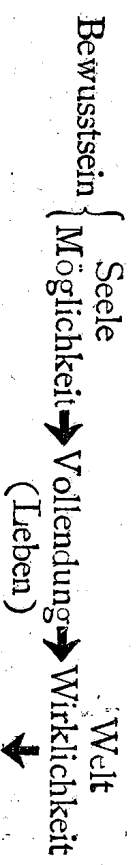
Geschichte
Physiognomik
(Menschenkenntnis)
Urphänomen
Tragödie, Kunst
(Fügung)

Natur
Systematik
(Wissenschaftliche Erkenntnis)
Objekt
Physik, Logik
(Bewegung)

かくの如き見地に立つて考へてみるとシペンゲレルの言ふが如くならば「古代—中世—近世」といふ圖式の意味は消えて了ふ。而して、自然認識は之を教へる事が出来るが歴史に對する具眼者は生まれるのである。前者は eine Arbeit であつて後者は實に eine Schöpfung である。形態と法則、比喩と概念、象徴と形式とは各々様々な機關を有する。而して此處に現れるものは生と死との關係で

シペンゲレル『泰西の結末』を讀む (飯田)

ある、建設と破壊との關係である。悟性は「認識する」に依て概念を殺し所知 (das Erkante) を化して硬化せる對象と爲し切斷し分割し得るやうにして了ふ。觀照はものを生かしてゆく、生々とした深く感ぜられた統一を有する個々ものをば具體化する。眞の歴史家たる藝術家は「事物の轉成」(wie etwas wird) を觀照する、而して一度考察したものを枝葉に涉つて味ひ直し今一度其處に das Werden を體驗する。然るに理學者は勿論のと縦令實踐的歴史を描く人であつても體系を作る人 (Systematiker) は「事物の成果」(was geworden ist) を經驗する。藝術家の心情は完成せるもの完全なるもの換言すればミクロコスモスを自ら實現せんとする。理學者の精神は刹那の現象に向く (S. 147)。而して此の事を説明する爲に次の圖式をシペンゲレルは描いた (S. 147-148) —



Anschauung und Erkenntnis } Werden → Ausgedehntes
 Richtung Organisch Mechanisch
 Symbol, Bild Zahl, Begriff

Weltbild } Geschichte Natur
 Gestalt Gesetz
 Physiognomik Systematik
 Religion, Kunst (Wissenschaft, Praxis)



シペンゲレルは以上の如き考へを以て「比較形態學」を歴史の部面に試みたが、更にその研究の結果はごうであるかといふことに就て表解を三種提出してゐるからその中の第一表に基いて彼の觀照の結果を窺はう。

第一表に於ては印度文化(紀元前一五〇〇年以後)、古代文化(紀元前一二〇〇年以後)アラビア文化及び西歐文化(紀元九〇〇年以後)の四つを比較して精神發展の時期を春夏秋冬に分けてゐる。春は地方的直觀の時期で、めざめゆく夢幻精神が多の創造を行ひ超人格的統一と横溢ミトツスを見た、之が又二期に分れる。春の初には神話が生れて世

界顧慮と世界憧憬とが特徴になり第二期に於て世界現象を神秘的形而上的に形成した。夏になると自覺が熟して來て初めて公民的批判的抗爭が現はれる。先づ第一に「宗教改革」が行はれて印度ではウバニシャト、希臘ではデオニソス崇拜、アラビア文化ではシリヤ的神秘觀、西歐ではプロテスタントが現はれた。次に世界感を純正哲學的に把握する事が始まり理想觀と現實觀とが對立した。次に新數學成り世界形式の模像及一般概念としての數概念が導かれた。次に敬虔派の時代となり知的狂信となる。秋になると大都市の知識階級の時期で先づ「啓蒙運動」となり悟性の力が信せられ、「理性宗教」などが生れるが、次で數學的思索絶頂に達し、更に大きな體系が生れる。冬になると、愈々世界都市的文明となる。精神の形成力は弱まり生命そのものが疑はれ、非宗教的非哲學的世界都市風が現出する。先づ物質的世界觀が生れ、次で「數學なき哲學」の時期が始まらうとし、數理的形式世界の内部が完成し次で哲學が講壇哲學となり終に文化の行きづまりが來る。

藝術の部面では「文明」に到達すると先づ「*Monderheit*」の精神現はれ次で古代のモチフや外來のモチフを模倣する事となり終に外來文化に沈潜する(第二表)。政治の部面について考へてみると、文明に到達した時、世界都市と地方との對抗となり第四階級たる民衆が擡頭する。第一期に於て貨幣中心となり經濟が錯綜する、西歐文化でいへば、西歐文明となつた時で、ナポレオン時代から世界大戰に至る時期に方り、社會主義と帝國主義とが相争ふ。第二期に入つて、「*Casarianism*」行はれ、第三期に「*Agypticismus*」となり「*Mandarine-ntum*」となり乃至「*Byzantinismus*」となつて行詰り新しい何かの文化に轉するのであるが、シペングレルに依れば現今は尙ほ第一期に該當する。而してシペングレルの觀照は實に此の文明期に向けられるのである。

シペングレルの意見については尙ほ言ふべきものが多いけれども、既に餘程の紙幅を費して了つたから此を以て筆を擱く。此書の提出する一二の特殊問題に關しては他日の機會を得て大に論じて

見たいと思つてゐる。第二卷が引續き公刊された曉には更に注意すべきものがあるであらうと思ふが、第一卷を手にしただけでも私の平常興味を傾けてゐるアラビア文化に對するシペングレルの見解を看過し得ないのである。もとより全體を通じて論議さるべき點が多い。文化の典型についての釋明や文化より文明への展開に對する觀照の歸結や其他仔細の點に於て賛成し難いものがある。但だシペングレルが提示したものはシペングレルの言に従へば「藝術的歴史觀照」に基く「史實形態學」なのである。獨逸に於ても此書は大に問題となり現に雜誌「*Jugos*」は昨年特別號 *Spengler-Heft* を出してゐる。一般讀書界にも大に歡迎を受け一九一九年初版を發行して以來一年の間に二十餘版を重ねてゐる。然しシペングレルの意見は當然第二卷が公にされた後でなくては全體的に之を論じてはならない。たゞ最後に此處には參考までに、第一卷卷末に示してある第二卷「*Welthistorische Perspektiven*」の目次をばそのまゝ記す事にする。

I. Grundformen der Geschichte.

1. Ursprung und Landschaft. Die Gruppe der

hohen Kulturen. Völkerformen und Sprachen.

2. Die Geschichte einer Kultur als Ablauf eines organischen Prozesses. Urvölker, Kulturvölker, Fellachenvölker. Beispiel: Die Kultur der Maya.

II. Das Problem der Zivilisation.

1. Kultur und Zivilisation. Land und Stadt.

Instinkt und Intellekt. Bauerntum und Bürger-
tum. Beispiel: Der Aufbau der ägyptischen
Kultur.

2. Weltstadt und Provinz. Zur Psychologie der
Modernität.

3. Der Imperialismus. Das chinesische Reich;
das Imperium Romanum. Die westeuropäische

Zukunft.

III. Probleme der arabischen Kultur.

1. Historische Pseudomorphosen: Die römische
Kaiserzeit.

2. Der Puritanismus: Pythagoras, Mohammed,
Cromwell.

3. Das Judentum.

IV. Der Staat.

1. Die indische Kultur und das Problem der
Stände.

2. Antike und abendländische Staatsidee: Polis
und Dynastie.

3. Stadien der politischen Form. Parlamentari-
smus; Cäsarismus.